

〈論 文〉

複合動詞「—こむ」と英語表現との対照研究

ローレンス・ニューベリーペイトン[†] (東京外国語大学大学院博士後期課程)

A Contrastive Analysis of the Compound Verb "-komu" and English Expressions

Laurence Newbery-Payton (Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Course)

キーワード: 複合動詞、日本語教育、内部移動、状態変化、空間前置詞

Key words: compound verb, Japanese language education, internal motion, change of state, spatial preposition

要旨: 本稿では、「こむ」を後項とする複合動詞（以下、「—こむ」）の意味分類と教授法について論じる。前項・後項動詞の意味に注目し、従来の研究で十分考慮されてこなかった「状態変化」を表す「—こむ」の用法を見なおす。この考察に基づいて、「—こむ」と英語における「内部移動」を表す形式 in(to)との（非）対応関係を明らかにし、英語を母語とする日本語学習者にとって「—こむ」の用法がより理解できると思われる教授法を提案する。

Abstract: This paper proposes a semantically-based analysis of the Japanese compound verb “-komu” and considers its change of state meaning to be more widespread than assumed in previous literature. Based on this observation, the author proposes pedagogy aimed at learners of Japanese whose native language is English to provide more comprehensive understanding of the uses of “-komu”. Forms in English expressing internal motion do not cover the same range of meanings as “-komu”, particularly in its change of state meaning. This paper offers concrete proposals to adapt pedagogy concerning Japanese compound verbs to meet the needs of learners of a particular native language.

原稿受理日 (2018-10-01)

査読後掲載決定日 (2019-01-15)

日本研究教育年報. 2019, Vol. 23, pp. 1-17. ISSN 2433-8923



[†] 本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

1. はじめに

本稿では、「一こむ」を後項動詞とする複合動詞（以下、「一こむ」ⁱ⁾）の意味用法を捉えなおし、英語を母語とする日本語学習者（以下、「学習者」）にとって効果的な教授法を提案する。

従来の研究では「一こむ」の「内部移動」用法が重視されてきたが、本稿では「状態変化」を表す「一こむ」の用法にも注目した新しい分類を提案した上で、言語データでその妥当性を示し、学習者向けの「一こむ」の分類を提案する。英語で「内部移動」を表す代表的な表現には前置詞 **into** や **in** がみられるが、「動詞+**in(to)**」と「一こむ」を同一視することはできない。特に「一こむ」の「状態変化」の諸用法では両者の対応関係がみられず、学習が困難な項目になっていると考えられる。したがって、本稿では a. 「一こむ」の「状態変化」用法における共通点と相違点；b. 各意味用法に対応する英語表現の記述を中心に、学習者にとって有意義な考察を試みる。

本稿は以下のように構成されている。2 節では主要な先行研究を批判的に検討する。3 節では本稿の見解を示す。4 節では教育への応用を念頭に「一こむ」と英語表現との対応関係を考察する。5 節では本稿の考察をまとめ、今後の課題を述べる。なお、関連する言語資料を付録で提示する。

2. 先行研究

本節では「一こむ」の意味と教授法に関する代表的な研究を取り上げ、それぞれの問題点を指摘しながら「一こむ」の意味用法を考察する。従来の研究の多く（甲斐（1999）、王（2012）、陸（2012）、崔（2018）など）は姫野（1978）または松田（2004）の議論を踏襲しているといえる。本稿では、両氏の研究を参考にしながらも、異なる基準を以て「一こむ」の分類を行う。2.1 節では姫野（1978）の研究を、2.2 節では松田（2004）の研究を取り上げる。

2.1. 姫野（1978）

姫野（1978）は「一こむ」の意味用法を大きく「内部移動」と「程度進行」に分けた上で、両者の下位分類を行っている。二格名詞の特性（「空間」、「個体」、「流動体」、「集合体・組織体」など）を分類基準として、「内部移動」を 7 種類に分類している。ところが、「閉じた空間」への内部移動なのか、「自己の内部」への内部移動なのかなどについては、記述としては妥当であるとしても、学習者にとって有意義な分類とは限らない。以下の（1）～（5）からわかるように、英語の場合「内部移動」の「一こむ」の用法はほとんど前置詞 **in(to)** に対応すると思われるⁱⁱ⁾。ここでは日本語及び英語以外の例文は挙げないが、付録 1 では他言語との対応についても示す。4 言語（中国語、英語、韓国語、ベトナム語）のいずれかを母語とする者は、日本語学習者の半数以上を占めているがⁱⁱⁱ⁾、「内部移動」とされる例は二格名詞の特性にかかわらず、概ね対応する傾向にある。

- (1) 彼は橋の上から川に飛びこんだ^{iv)}。

He jumped from the bridge into the river.

（閉じた空間へ）

- (2) 本を読みながら気になったところにメモを書きこんでおく。

I write notes in places that catch my attention when reading a book.

(個体の中へ)

- (3) この街の風景に溶けこむような建物をデザインする。

Design a building that blends into the cityscape.

(流動体の中へ)

- (4) 最新の家電製品には音声認識の機能が組みこまれているものがある。

Some of the latest home appliances have a built in voice recognition function.

(集合体・組織体の中へ)

- (5) これは、新聞にチラシを折りこむ機械だ。

This is a machine for inserting fliers in newspapers.

(自己の内部への移動)

姫野 (1978 : 50) は「内部移動」でない「一こむ」の用法を「程度進行」と呼び、その下位分類として「固着化」「濃密化」「累積化」の3種類を挙げている。後述するように、「程度進行」の用法は前置詞 *into* や *in* には対応せず、その他の形式で表現される^v。したがって、姫野 (1978) のいう「程度進行」用法は学習者にとって習得が困難と予想される。また、以下の (6) ~ (8) で示す姫野による「固着化」「濃密化」「累積化」の定義と区別は学習者にとって理解しにくいように思われる。

- (6) 固着化：「動作・作用の進行の結果、ある状態に至ったまま固定化しているというもの」(眠りこむ、寝こむ、黙りこむ、ふさぎこむなど)
- (7) 濃密化：「程度が高まり、状態が昂進していくもの」(老いこむ、冷えこむ、咳きこむ、更けこむなど)
- (8) 累積化：「何かの目的のため、人が動作や行為の積み重ねによりその技や対象とするものの質の向上を図るというもの」(泳ぎこむ、使いこむ、磨きこむ、煮こむなど)
- 姫野 (1978: 57-59)

姫野 (1978) が「内部移動」と「程度進行」の用法を区別していることには意義があるが、不十分な点が2つ挙げられる。第一に、教育現場に実際に応用できるかについて疑問が残る。きめ細かい分類がなされているが、それが学習者の理解を促すかどうかは不明である。例えば「内部移動」における二格名詞の特性や自他の問題は多くの学習者の母語との対応には影響しない。また、「程度進行」の下位分類について、次節で考察する松田 (2004) は「固着化」と「濃密化」を一括しているが、姫野の分類ではその共通性が見逃されている。第二に、姫野 (1978) は実例を引用してはいるが、用例数の多寡に基づいて分析を進めているとはいいがたい面がある。これは「Web データに基づく複合動詞用例データベース」^{vi} (以下、「データベース」) と対照させることで明白になる。本稿でデータベースを用いるのは、「一こむ」の使用実態を客観的に検証するためである。姫野 (1978) が挙げる284の例のうち、80の複合動詞がデータベースに出現しない。これは、データベースにあるものの姫野が言及していない49の複合動詞を上回っている(付録2を参照)。すなわち、

姫野が述べている「-こむ」の使用は実態と一致しない部分が少なくない(3.2 節を参照)。

以上、今日の観点では姫野(1978)は学習者への提示や言語資料の扱いに関して不十分なところがあることを指摘した。

2.2. 松田(2004)

姫野(1978)が「-こむ」の用法を細分しているとするれば、松田(2004)はそれらを統一する立場をとっているといえる。具体的には、認知意味論の立場から「-こむ」の用法が全て図1で示す「イメージスキーマ」に由来するとしている。図1のどの部分(「 α 」、「 β 」など)が焦点化されるかによって、「-こむ」の意味が変わると述べている。

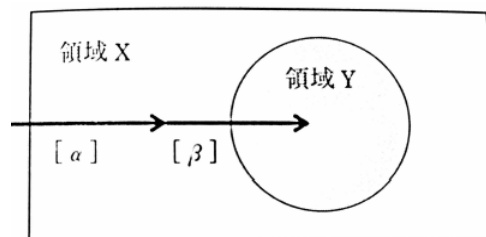


図1:「-こむ」の基本的な意味のイメージスキーマ 松田(2004: 75)

上記のイメージスキーマに基づいて松田(2004)は4つの下位スキーマを提示し「-こむ」の各々の意味用法を説明しているが、本稿では以下の表1で示す松田のまとめを主たる考察対象とする。松田にとって「-こむ」の用法を分ける最大の分類基準は、二格を伴うか否かという格関係の特徴である。二格を伴うものには前項動詞が「内部移動」を含意するもの(Bタイプ)と含意しないもの(Aタイプ)がある。A及びBタイプは概ね姫野(1978)の「内部移動」に相当する。一方、二格を伴わない「-こむ」には「固着」を表すもの(Cタイプ)と「反復」(Dタイプ)を表すものがある。前者は概ね姫野の「固着化」及び「濃密化」に、後者は概ね姫野の「累積化」に対応している。以下、Cタイプ(9)及びDタイプ(10)の例を挙げる。また、筆者による英訳も併記するが、into との対応がないのは一見してわかる。

- (9) a. 最近、朝晩はかなり冷えこむ。
Recently, it's been very cold in the mornings and evenings.
- b. 息子は風邪をこじらせて3日間寝こんでいた。
My son's cold got worse and he stayed in bed for three days.
- (10) a. 夏合宿でかなり走りこんだおかげで、足腰が鍛えられた。
I trained hard at summer camp and my legs got stronger as a result.
- b. おいしいスープを作るには、一日かけて弱火でじっくり煮こむことが大切だ。
To make a tasty soup, it's important to stew it all day over a low heat.

表 1 「一こむ」の意味分類 (松田 2004 : 110)

二格 (～の中に) を伴う「一こむ」		二格を伴わない「一こむ」	
A タイプ	B タイプ	C タイプ	D タイプ
V1 は「内部移動」を含意しない	V1 自体が「内部移動」を含意する	V1 が示す状態への変化とその状態への固着	V1 の (反復) 行為により生じる状態変化
例) 飛びこむ、呼びこむ	例) 植えこむ、埋めこむ	例) 冷えこむ、眠りこむ、老けこむ	例) 十分に走りこむ

表 1 では複合動詞全体と前・後項動詞の働きが厳密に分けて提示されているとはいえない。A 及び B タイプの説明は前項動詞に対してなされているが、C 及び D タイプの説明は後項動詞あるいは複合動詞全体に対してなされているのである。表 1 に修正を加えて、松田 (2004) の立場に忠実でありながら各タイプの異同がより明確な表を以下に示す (修正箇所は網掛け及び太字で示す)。

表 2 松田 (2004 : 110) に基づく「一こむ」の意味分類 (本稿の筆者による修正案)

二格 (～の中に) を伴う「一こむ」		二格を伴わない「一こむ」	
A タイプ	B タイプ	C タイプ	D タイプ
V1 は「内部移動」を含意しない	V1 自体が「内部移動」を含意する	V1 自体が「状態変化」を含意する	V1 は「状態変化」を含意しない
「一こむ」は内部移動を表す	「一こむ」は内部移動の固着を表す	「一こむ」は状態変化の固着を表す	「一こむ」は状態変化を表す
例) 飛びこむ、呼びこむ	例) 植えこむ、埋めこむ	例) 冷えこむ、眠りこむ、老けこむ	例) 十分に走りこむ

改めて松田の体系をみると、i.二格の有無と、ii.前項動詞が内部移動・状態変化を表すか否かで 4 つの分類ができていることがわかる。それに対応して、「一こむ」は内部移動 (A タイプ)、内部移動の固着 (B タイプ)、状態変化の固着 (C タイプ)、状態変化 (D タイプ) のいずれかを表す。内部移動の意味が後項動詞自体によるのは A タイプのみという点に注目されたい。この事実は、内部移動を中心に据えた分類では見えてこない。なお、松田は図 1 のイメージスキーマを提示しながらも、B～D タイプを A タイプに関連して説明しているため、内部移動を「一こむ」の中心的な意味として提示していると考えられる。A タイプと B タイプの複合動詞を分けている点において松田 (2004) の分類は姫野 (1978) の分類より適切と思われるが、その帰結、すなわち B タイプの後項動詞が内部移動を表さないという点で A タイプとは異質であること、が十分重視されていないように思われる。後述するように、これは日本語教育において「内部移動」を表さない「一こむ」の習得の妨げになりかねない。

続いて、松田 (2004) における 4 タイプの位置付けについて述べる。表 2 のような分類は対称性があり、「一こむ」の意味用法を簡潔にまとめているとも思える。その反面、2 つの変数 (二格の有無、前項動詞の意味) を基に 4 分類を行っているため各タイプを等位に扱っているように捉えられるが、この扱いは果たして妥当なのだろうか。特に D タイプは例として挙げられる動詞の数も少なく、かつそのような動詞ですら特定の条件 (「十分」のような副詞と共に起する場合や二格名詞を伴わない場合など) の下でなければ「状態変化」の解釈が成立しにくい。すなわち、「走りこむ」は多くの場合、単なる内部移動を表すと理解されるであろう。また、松田 (2004 : 184) が D タイプを「A タイプと C タイプが結合した形での派生用法」とする理由は不明である。C タイプは (11) のように無意志動詞化

が起こる特徴があるが、これは D タイプが表す「目的のため（「満足できる状態」に向かつて）反復的にまたは長時間にわたってその行為を熱心に行う」（同上、下線は松田）意味とは性質が異なる。次節で述べるように、D タイプはむしろ B タイプとの類似性において捉えるのが適切である。

- (11) 彼はさっきからずっと何か考えこんでいる。 （松田 2004：182、下線は筆者）

松田（2004）は二格の有無を最大の分類基準としているが、二格の性質は一枚岩とは言えない。(1) ～ (5) にあったように着点の二格もあれば、(12) のように着点よりも存在場所を表す二格もあり、(13) に至っては二格を着点とみなすには無理があるであろう。二格が様々な意味を表せるだけに、学習者の理解には格よりも前項・後項動詞の意味を重視する分類のほうが有効と思われる。

- (12) 彼はトラブルの処理のため会社に泊まりこんで仕事している。

- (13) 彼は客の苦情に困りこんでいた。 （複合動詞レキシコン、下線は筆者）

松田（2004）は姫野（1987）では見逃された共通点（「固着化」・「濃密化」＝C タイプの類似性）及び相違点（A タイプと B タイプの区別）を明らかにしている。また、格関係という客観的な基準を以て分類を行っている。ただし、二格の重視や各タイプの関係については問題もはらんでいる。次節では松田及び姫野を参考にしながら本稿の立場を詳述する。

3. 本稿の立場

本節では本稿の提案を詳しく論じると共に、「一こむ」の多義性について考える。また、データベースを用いて日本語教育における本稿の立場の妥当性を示す。

3.1. 「一こむ」の新しい分類

本稿では「一こむ」の意味用法が「内部移動」とそうでないものに分かれるという点においては姫野（1978）と同様の立場をとるが、「内部移動」の範囲を概ね松田（2004）の A タイプのみに限定する^{vii}。「内部移動」を表さないもの（概ね松田の B、C、D タイプ）は状態変化を表すと考える。B と C タイプの前項動詞はいずれも変化を表すが、その意志性で分けられる。「こむ」によって、それらの状態が深まる（松田のいう「固着」が生じる）。一方、D タイプの前項動詞は動作動詞であり、状態変化の解釈には解釈規則（米山（2009：96）を参照）が必要と考えられる。すなわち、一回的動作が繰り返し、あるいは長時間行われると解釈される（それぞれ「反復」「継続」と呼んでおく）。「走りこむ」の場合、一回の走る行為だけでは通常、状態変化が生じない。走る行為の反復によってはじめて、走る主体に何らかの状態変化（足が鍛えられることなど）が生じたと解釈される。「煮こむ」の場合、煮る行為が継続しないと煮物の状態（とろみの度合いなど）に変化が生じるとはいいがたい。いずれの場合でも、D タイプは意志動作を、派生的に状態変化を引き起こす事象として表現する。これは、意志動作によって一回的な事象で状態変化を表す B タイプとの相違点である。以上のように、松田（2004）の D タイプは、C タイプとの関連において捉えるのではなく、B タイプの特殊なものとして捉えた方が妥当であると考えられる。

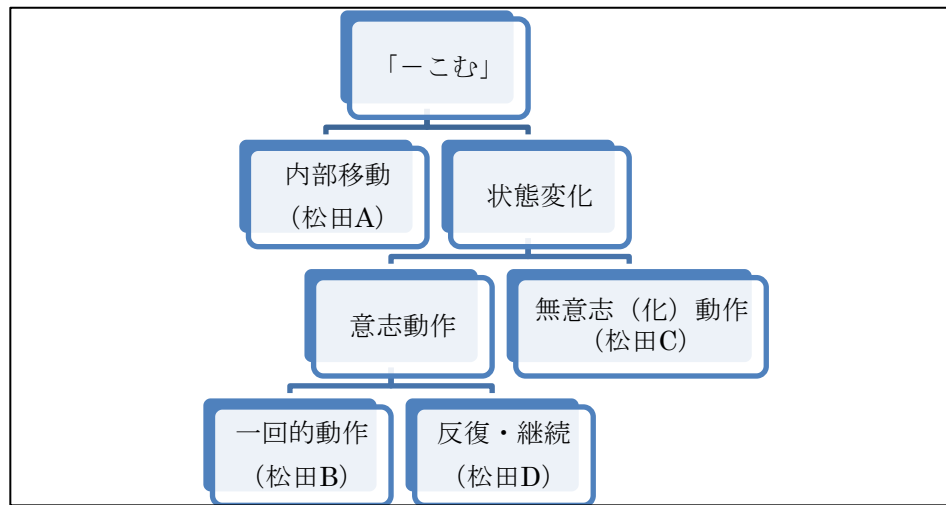


図2 本稿の「一こむ」の分類

本稿の提案を図2でまとめる。図の左側には内部移動用法が、右側には状態変化用法が位置する。状態変化の具体的な解釈は述語動詞の意志性やアスペクト的特性（動作動詞、変化動詞など）といった意味特徴やその他の語彙の意味などによって決まると考えられる。

前項動詞の行為が状態変化に及ぶと捉えがたい場合、明示的な手段（着点のニ格名詞：Aタイプ）または暗示的な手段（反復の再解釈など：Dタイプ）がとられる。後者の場合、状態変化の基準は話者に委ねられる。換言すれば、「走りこむ」の客観的な基準（最低距離や回数など）は存在しない。また、前項動詞が状態変化を表すとしてもニ格名詞が現れない場合（Cタイプ）、状態変化の程度も同様に話者の判断に委ねられる。例えば、何度になると「冷えこむ」という（ことが自然なの）かは当然ながら個人差がある。これが「一こむ」にまつわる「評価」や「主観性」の由来であろう。なお、この評価は(14)で示すように表現される事態によって（より正確に言えば名詞の性質によって）変わる場合がある。

(14) あの人は{包丁/税金}を使いこんでいる。

3.2. 内部移動が占める「一こむ」の割合の検証

姫野（1978：66）によれば「一こむ」の8割が「内部移動」を表す（どのように計算しているかは述べられていない）。本節では「データベース」でこの主張の検証を試みる。具体的には、姫野（1978）、松田（2004）、データベースの全てに出現する複合動詞（タイプ数：68、トークン数：129726）を対象にその出現頻度数を調べた。姫野（1978）のいう「内部移動」のタイプ数は51（75%）、トークン数は101804（およそ78%）と、姫野の主張を概ね裏付けているようにみえる。

続いて、「内部移動」を表す「一こむ」が概ね松田（2004）のAタイプに相当すると考える本稿の立場から同様の調査を行った。なお、多義性の問題（すなわち、BタイプやDタイプとされる複合動詞にAタイプの用法もあるため、それらの動詞をBタイプやDタイプとして扱えばAタイプの割合が低く計算されるというおそれ）に対処するために、松田がDタイプの典型例とする「走りこむ」の全用例をAタイプとして計算した。その結果、「内部移動」はタイプ数としては33、トークン数としては73188と、それぞれ全体のおよそ49%と56%にとどまることがわかった（「走りこむ」の用法には松田（2004）の言うDタイプ

の用法もあるわけであるため、トークン数は割合がより低いはずである)。すなわち、「一こむ」の用法のおよそ半分を習得するには、内部移動を超えた、より総合的な説明が必要になってくる。上記の結果は a.内部移動の割合が先行研究で言われるほど高くないこと；b.「内部移動」を「一こむ」の意味用法の一つにすぎないとする立場に妥当性があることを示唆している。

本節では本稿の「一こむ」の分類を提案した。その特徴は従来の研究と比較して「一こむ」の用法の多くを状態変化とみなす点である。3.2 節では「一こむ」用法における状態変化が占める割合を明らかにすることで本稿の提案の妥当性を示唆した。本稿の分類の目標の一つは、学習者への還元であるが、次節では学習者向けにどのような教授法が効果的かについて考える。

4. 英語を母語とする日本語学習者向けの「一こむ」の教授法

「一こむ」は日本語における語彙的複合動詞のなかでも最も出現頻度が高く（陳・松本 2018：114）、上級日本語学習者にとって必要な学習項目であると考えられる。ところが、日本語学習者の産出では複合動詞の非用が顕著である^{viii}。英語と比較してみると、「内部移動」の用法に限っていえば、「一こむ」と in(to)が対応しているようにみえるが、「内部移動」を重視した指導では、in(to)と対応しない、状態変化を表す「一こむ」は学習者にとって理解しにくいだろう。「一こむ」の意味拡張を主張しても、類似した意味拡張が学習者の母語にない場合、そのような「一こむ」の用法の使用はもちろん、理解さえ難しいと思われる。そのため、4.1 節では学習者にとって困難と予想される状態変化を表す「一こむ」の各用法に対して、学習者のために一定程度の一般化をはかりながら、対応する英語の形式を記述する。4.2 節では内部移動における前項動詞の多様性及びその他の特筆すべき事項を取り上げる。

4.1. 英語母語話者向けの「一こむ」分類

本節では英語との対応を通して「一こむ」の状態変化用法を再び考察する。結論から述べると、状態変化の諸用法は共通点を有する一方、何を以て状態変化が生じるかによって英語における対応表現が変わってくる。以下の表 3 ではローマ数字で各種類を表示し、松田（2004）の分類との比較、動詞の例及び対応する英語表現を示す。表 3 自体は教育現場で用いると想定されているわけではないが、日本語と英語の対応関係をまとめるものとして教材を作成する際参考にはなるとと思われる。

図 2 は日本語における「一こむ」の体系を記述するものであった。その趣旨は、（従来述べられてきたよりも範囲の狭い）内部移動を表す「一こむ」に対して、状態変化を表す「一こむ」が複数存在することであった。この指摘を、表 3 では学習者に配慮しながら、〈内部移動〉の概念にかかわる状態変化表現の対照を記述する。そのため、表 3 は図 2 より細かく分類されている。

表 3 からわかるように、「動詞+in (to)」は「i.内部移動」においてしか「一こむ」と対応しておらず、「一こむ」=in (to)」という誤解を回避する工夫が必要である。i.における前項動詞の多様性は次節で述べるとして、本節では ii.から v.について考察する。これらの用法は二格名詞の出現が不要または不可能であるというのが一つの特徴である。英語において内部移動を表す in(to)は前置詞である以上、後置する名詞が要求されるが、そのような名詞がなければ「動詞+in(to)」の形式は用いがたい（直示的用法など、一部例外がある）。また、名詞が出現しないことが、学習者の理解の妨げにもなると考えられる。つまり、着点の二格名詞のように、結果状態を示す必須要素が文中に現れないのである。以下、各用法を順番に考察する。

表 3 英語母語話者向けの「V1 こむ」分類

「一こむ」の種類 [自他]	松田分類	例 (V1)	対応する英語表現 〈概念化〉
i. 内部移動 [自・他] 二格=到着点	A	飛び、走り	〈内部移動〉 動詞+in, into など: <i>fly/jump in(to)</i> ,
ii. 定着 [自] 二格=存在場所	B (一部)	住み、座り、泊まり	〈定着〉 個別の語彙・表現: <i>stay (with one's employer/ seated/at the office)</i>
iii. ものの量の増加 [他]	B (一部) など	買い、着、吸い、 貯め、食べ、包み	〈ものの量の上昇→事象の完了〉 動詞+up <i>buy/wrap/soak/save/eat up</i>
iv. 動作の反復・継続 a. 反復 [自] b. 継続 [他]	D	a. 泳ぎ、走り; ※聞き (他) b. (他): 使い、煮、 練り、磨き	〈過程・結果〉 (in)to を含む結果構文/way 構文: <i>run (her way) into shape</i> (in)to を含む結果構文/way 構文: <i>polish to a shine</i> 副詞 (「b.継続」のみ): <i>boil/polish thoroughly</i>
v. 程度の増加 a. 状態の程度の増加 [自] b. 動作の程度の増加 [他]	C B (一部)	a. 状態の増加 (自) *: 思い、考え、寝、眠り、 冷え、老け *自動詞化・無意志化を含む b. 動作の増加 (他): 植え、塗り、抱き 埋め、教え	〈程度〉 副詞: <i>age heavily, sleep/think deeply</i> <i>deep in+名詞</i> <i>deep in thought</i> 副詞: <i>plant carefully, apply thickly,</i> <i>hug tightly</i> 接頭辞 in を含む動詞: <i>implant, instill</i>

「ii.定着」は二格名詞を伴うことがあるが、「i.内部移動」と違って、「住みこむ」や「座りこむ」、「泊まりこむ」に伴う二格名詞は到着点というよりは存在場所を表す。「長時間」という意味合いは「iv.動作の継続」と類似しているが、両者の評価的意味の性質が異なる。松田 (2004) の C タイプのように、無意志動詞はマイナス評価になりやすく、意志動詞の場合はプラス評価になりやすい。ところが ii.の動詞は意志動詞にもかかわらず、どちらかという望ましくない状況、あるいは何らかの「非常事態」と連想する傾向にある^{ix}。英語ではこれらの複合動詞を動詞 *stay* で表現できる場合があるが、動詞 *stay* は「こむ」の意味に相当し、括弧で示すように前項動詞で表現される様態は二次的あるいは任意である。

「iii.ものの量の増加」では前項動詞が表す行為によるヲ格名詞の量の増加を通して状態

変化が捉えられる。例えば、「買いこむ」は動作主が購入物をたくさん所有することになることを表し、「包みこむ」は対象の回りを囲む包装の量が増加すること（によって、対象がしっかり包まれる状態になること）を表す。このように日本語ではものの増加が状態変化の要因となる。英語ではむしろ「ものの量の上昇」の概念化がなされるが、「上昇」によって事象が完了することを表す傾向がある。したがって、この上昇及び完了の意味を表現するには不変化詞 **up** が用いられる場合が多い。その結果、本来「内部移動」（日本語）と「上昇」（英語）という異なる空間概念を表す形式が同一の事象を表現するようになる。このような（非）対応は内部移動を重視する教授法では見逃されかねない。「着こむ」と **wrap up (warm)** の対を例として挙げる。英語では服の量の上昇＝増加によって「着る」行為が完了したことを **up** で表す。日本語では服をたくさん着た結果生じた状態変化を「一こむ」で表す。動詞「着る」には多義性があるため区別しにくいだが、それぞれの概念化を英語で表現し分けると、英語の表現は “**finish putting on clothes**”（「着る」の起動的（inchoative）意味の完了）に近く、日本語の表現は “**be wearing lots of clothes**”（「着る」の状態的（stative）意味）に近いであろう^x。

「iv. 動作の反復・継続」を表す「一こむ」は 3 節で述べたように、動作動詞の反復あるいは継続によって状態変化が生じるものである。この種類には前置詞句を結果述語とする結果構文（以下、「結果構文」）やいわゆる **way** 構文が対応することもある。一語の対応がないことから iv. の習得は特に困難と想定される。英語においても状態変化を表すには特別な手段が用いられるということは、図 2 で示したようにこの種の意味が特別であることを支持するといえる。

日本語ではいわゆる「弱い」結果構文、つまり変化動詞を含む結果構文しか容認されず、英語と比べ結果構文の生産性が低いとされている（Washio 1997）。英語のように変化を含意しない動作動詞から結果構文をつくることはできないが、「一こむ」は「反復・継続」性を強調しつつ、「走る」や「磨く」などの動作動詞と（明示されない）結果を結びつける形で、ある面では英語の結果構文と同様の機能を果たしている。その意味において、日本語の結果構文では表せない意味を「一こむ」は一部補っている。一方、英語は動作動詞でも結果構文が可能であるが、その容認には、以下の (15) のように **into shape** 「健康的な状態になるまで」や **to a shine** 「ピカピカになるまで」といった結果状態の指定が必要である。「一こむ」の場合、結果状態は明示されず、動詞の語彙的意味や話者の判断によって了解されるが^{xi}、学習者からすれば、動作とその結果を結びつける表現としては十分類似しているのではないだろうか。

(15) a. **Run Into Shape: 30-Day Running Challenge.** (オンライン^{xii})

b. The crankarms are CNC-machined, then hand **polished to a shine.** (COCA)

iv. に対応するもう一つの英語構文として、いわゆる **way** 構文が挙げられる。米山 (2009 : 100) によれば **way** 構文は「空間表現と状態変化表現の両方が可能」な構文であるが、ある特定の様態を伴う行為によって動作主が前置詞に指定される、広義の経路を通る意味を表すといえる。この構文には移動様態 (**roll** 「転がる」) を表すもの (16a) や随伴動作 (**chuckle** 「くすくす笑う」) を表すもの (16b) の他、複数（あるいは単数）事態による状態変化を表す場合もある (16c)。この例では選手の泳ぐ行為が（繰り返し）行われ、結果として記録が更新される（選手が記録保持者という身分になる）、という状態変化が生じる^{xiii}。このように、日本語で複合動詞が表す事態は、英語では構文レベルで表現される傾向があるように思われる。英語の構文並みの意味がいわば複合動詞一語に凝縮されている。学習者には一語の対応のみならずより大きい単位の対応形式があるという認識が求められる。

- (16) a. The acorn rolled its way down the hill.
 b. He chuckled his way down the street.
 c. Michael Phelps swam his way into the record books.

「v. 程度の増加」における自動詞は松田（2004）の C タイプ（姫野（1978）の「固着化」及び「濃密化」）に相当するが、「植えこむ」や「埋めこむ」などの他動詞の例もみられる。いずれの場合でも、英語では第一に副詞で表現される。これが示唆することは、v.（とりわけ他動詞の例）と「iv. 動作の継続」の類似性である。両言語において、単数事態における行為の蓄積（後述）による状態変化が同じ形式で表現されている（日本語の場合、「一こむ」；英語の場合、「動詞＋副詞」）。ただし、iv. を表現するためには英語の構文が対応することもあったのに対し、v. では結果が指定されないこともあり、そのような表現は容認されない。その代わりに、自動詞の場合、状態を「容器」として捉え、「deep in＋名詞」で状態の程度を「深さ」の比喻で表現し、他動詞の場合、少数ながら in が接頭辞として動詞に前置する例もある。

ただし、この種の「一こむ」と英語の副詞が完全に対応するわけではない。例えば、(17) では和文の副詞の有無にかかわらず、英訳が変わらない。この場合、英語は日本語と違い、副詞的意味を生産的に動詞の一部に含めることができない（上述した in の接頭辞はもう生産性を失っていると考えられる）。英語では副詞類でも動詞でも「一こむ」の意味合いが訳出しきれていないと言わざるを得ない。ただ、第二言語習得の観点からは、学習者が副詞との関係を把握していればよいだろう。

- (17) {完全に/θ} 冷えこむ get very cold

ii. から v. の用法は全て状態変化を表すものの、どのように状態変化が生じるかにおいて相違点がある。表 4 では事態の単複、状態変化の要因、自他及び二格名詞の有無を基準にこれらの意味の共通点と相違点を整理する（便宜上、v-b. と v-a. の位置を交換している）。

まず、「ii. 定着」は二格の有無において他の種類と区別される。また、「iv-a. 動作の反復」は複数事態を表すことで他の種類と異質である。「iii. ものの量の増加」の特徴は、ものの蓄積^{xiv}が状態変化の要因となっていることにある。上述したように、「iv-b. 動作の継続」と「v-b. 動作の程度の増加」は共通点を持っており、最終的に前者とみなすか後者とみなすかは個別の動詞の語彙的特性による（一般常識から長時間行われる動作と捉えやすいものほど、「継続」として解釈しやすいであろう）。なお、本稿では自他を一つの分類基準として用いているが、自他が格別に意味に影響するのは「反復」と「継続」の区別においてである。他の種類では自他より何を以て状態変化とするかのほうが学習者の理解につながるのではないだろうか。

表 4 「一こむ」の状態変化用法における特徴

種類	事態の単複	状態変化の要因	自他	二格名詞
ii. 定着	単数事態	行為の蓄積	自	有
iii. ものの量の増加	単数事態	ものの蓄積	他	無
iv-a. 動作の反復	複数事態	行為の蓄積	自	無
iv-b. 動作の継続	単数事態	行為の蓄積	他	無
v-b. 動作の程度の増加	単数事態	行為の蓄積	他	有
v-a. 状態の程度の増加	単数事態	行為*の蓄積 *無意志化	自	無

以上、本稿の「一こむ」分類を提案した。改めて松田（2004）の提案と比べると、松田の B タイプとして分類されている動詞は本稿の ii.、iii. 及び v. に含まれることがわかる（表 3 を参照）。これは、松田が意味よりも格関係を重視した結果、意味的に異質な動詞を一括しているためであろう。本稿の提案のように、学習者の母語と比較しながら意味に基づく分類を優先的に設定したほうが、習得につながると思われる。

本節では「一こむ」の状態変化用法を対象に、学習者にとってより効果的な意味分類を試みた。次節では「一こむ」の内部移動用法及び学習者にとって間違いやすいと思われる個別の「一こむ」の事例について述べる。

4.2. 「内部移動」を表す「一こむ」における前項動詞の多様性及びその他の問題点

前節では学習者にとって最も困難と思われる「一こむ」の「状態変化」用法に注目したが、本節では「内部移動」用法における困難点を 1 つ取り上げる。この種の「一こむ」では、後項動詞の意味を予想できても、各々の複合動詞の全体的な意味を理解するには前項動詞との意味関係を把握する必要がある。この関係には多様性があり、必要に応じて学習者に明示的に説明することもあるであろう。例えば、「駆けこむ」や「飛びこむ」のように「移動様態」を表す前項動詞以外に、「どなりこむ」のように「随伴の動作」（内部移動の成立に必須ではない動作）を表す前項動詞や「なぐりこむ」のように「目的」を表す前項動詞もある。学習者は、後者と一見対応する *punch one's way in* という *way* 構文が存在することから、前項動詞「なぐる」が移動の手段を表すと解釈する可能性がある。

姫野(1978 : 64)は前項動詞との関係について、「大部分の複合動詞は「～して入る」（入れる）」、「～しながら入る（入れる）」、「～するようにして入る（入れる）」と言い換えることができる」と述べ、このような多義性を認識している。また、「なぐりこむ」や「どなりこむ」などでみられる「～するために入る（入れる）」と「刻みこむ」や「絞りこむ」などでみられる「～した後、その状態で入る（入れる）」という時間の前後関係に関する違いを指摘している。しかし、上述したように、「一こむ」の意味用法を分類する際に対象の特性を重視しているためこの多様性が可視化されていない。本稿では「状態変化」もそうであったように、前項動詞の適切な分類によって「一こむ」の様々な意味は理解できると考える^{xv}。

その他、母語からの影響で注目に値する事例を述べておきたい。まず、表面的な類似性のため間違いやすい項目が少なくない：「寝こむ」対 *sleep in* “遅くまで寝る、寝坊する”、「塗りこむ」対 *paint in (red/the gaps)* “（隙間を・赤く）塗る”、「炊きこむ」対 *cook in (broth/an oven)* “（だしで/オーブンで）調理する”、「送りこむ」対 *send in, send off, dispatch* など。これらの例が示唆するのは、*in* の多様性、また「一こむ」に対して複数の前置詞が対応し得ることである。

最後に、*in* が接頭辞のように英語の動詞に前置する場合がある。前節で言及した *implant*（埋めこむ）や *instill*（教えこむ）以外に *include*（詠みこむ）、*inhale*（吸いこむ）が挙げられる。これらの複合動詞は「詠みこむ」（A タイプ）を除いて松田（2004）の B タイプとして分類されている。また、*implant* を除いて、少なくとも現代英語ではこれらの動詞は接頭辞なしには意味をなさない。生産性も低いと思われるが、学習者にとって「一こむ」の概念の手がかりになる可能性はある。

本節では英語を母語とする学習者にとって有意義な事例を簡潔にまとめた。前節の考察と合わせると、「一こむ」に対する学習者の理解を深めることができると期待される。

5. まとめと今後の課題

本稿では主要な先行研究の批判的な検討を通して「一こむ」の意味用法を捉えなおした。「一こむ」の用法には、内部移動を表す用法だけではなく、状態変化を表す例も少なくないことが特徴であり、用法のひとつである「内部移動」を必要以上に重視することは、日本語の記述としても、日本語教育としても望ましくないことを述べた。状態変化により注目する「一こむ」の新分類に基づいて、各意味用法に対応する英語表現を記述することで、英語を母語とする日本語学習者による「一こむ」の指導法の改善を試みた。

従来の「一こむ」の解釈において、「内部移動」用法を重視する理解は *in(to)* と「一こむ」を同一視することになるおそれがある。両言語における「内部移動」の概念化（の範囲）は異なっており、「一こむ」に対応する英語表現は、前置詞 *in(to)* 以外に「内部移動」とは別の空間概念に基づく *up*、副詞を伴った表現、さらに結果構文や *way* 構文など、多種多様な形式が対応していることが明らかになった。

本稿では英語が母語である（または英語が堪能な）学習者を念頭に考察を行った。本稿が提示した分析が実際に効果的かどうかは実践的に検証する必要があるが、現在、英語母語話者向けの複合動詞の教授法が見当たらない中で、本稿の提案は教授法の改善に向けての第一歩といえる。韓国語や中国語、ベトナム語などを母語とする学習者はそれぞれ習得が困難な用法が異なるだろう。ただし、これらの言語においても「一こむ」との対応関係が成立しにくいのは状態変化の用法においてであるため、当該言語を母語とする学習者向けの教授法にも本稿の提案が一定程度応用できることが期待される。

「一こむ」のように、普遍的であると思われがちな空間概念に基づく言語形式は、第二言語習得の際に問題となる場合が少なくない。「あがる・あげる」や「だす」を後項とする複合動詞についても同様のことがいえる。いずれの場合でも、習得が表面的な対応関係を示す対にとどまってしまうことが懸念される。したがって、日本語及び他言語の（非）対応関係を精密に記述することは、学習者により相応しい日本語教育の構築に貢献できると考えられる。

参考文献

- Beavers, J (2008) Scalar Complexity and the Structure of Events. In J Dölling, T Heyde-Zybatow, and M Schäfer, eds., *Event Structures in Linguistic Form and Interpretation*, 245-265. Berlin : Mouton de Gruyter
- 陳奕廷・松本曜 (2018) 『日本語語彙的複合動詞の意味と体系 コンストラクション形態論とフレーム意味論』 ひつじ書房
- 張志凌 (2014) 「複合動詞「一こむ」の意味体系—中国語との対照的視点から」 東京外国語大学. 博士論文
- Goldberg, E and R Jackendoff (2004) The English Resultative as a Family of Constructions. *Language* 80 (3) 532-568
- 姫野昌子 (1978) 「複合動詞「一こむ」および内部移動を表す複合動詞類」 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房 59-82
- 甲斐朋子 (1999) 「複合動詞「一こむ」の程度深化の用法」 『ポリグロシア : 言語と言語教育-アジア太平洋の声』 2 : 1-8. 立命館アジア太平洋大学立命館アジア太平洋研究センター, 立命館アジア太平洋大学言語研究センター, 立命館アジア太平洋大学言語教育センター, 立命館大学言語教育センター
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究 : 認知意味論による意味分析を通して』 ひつじ書房
- Matsumoto, Y (1996) Complex Predicates in Japanese : A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'. Tokyo : Kuroshio

- 松本曜 (2009) 「複合動詞「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合動詞のタイプ」由本陽子・岸本秀樹編 (2009) 『語彙の意味と文法』くろしお出版 175-194
- 睦俊秀 (2012) 「「程度進行」の意味をもつ複合動詞「V1+こむ」の意味と構造に関する考察」峰岸真琴, 稗田 乃, 早津 恵美子, 川口裕司編『コーパスに基づく言語学教育研究報告』8: 185-208. グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」東京外国語大学大学院総合国際学研究院
- 村上雄太郎 (2013) 「ベトナム語の方向動詞'vao'の文法化: 日本語の「こむ」との対照を試みて」『神戸市外国語大学外国学研究』83: 3-18. 神戸市外国語大学
- 王秀英 (2012) 「日本語の複合動詞「～こむ」類と中国語の複合動詞“一进/入”類との対照研究—認知意味論からのアプローチ—」『言語化学論集』16: 73-84. 東北大学大学院文学研究科言語科学専攻
- 崔正熙 (2018) 「韓国語からみた日本語の複合動詞「V1+こむ」」『多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育第三回研究会』予稿集 1-14
- Walková, M (2017) Particle Verbs in English: Telicity or Scalarity? *Linguistics* 55 (3) 589-616
- Washio, R (1997) Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49
- 山口昌也 (2013) 「複合動詞「～込む」と前項動詞の格関係—「複合動詞用例データベース」を用いた分析—」影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』ひつじ書房 185-212
- 米山三明 (2009) 『意味論から見る英語の構造: 移動と状態変化の表現を巡って』開拓社

参考データベース・資料など

- Davies, Mark. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English (COCA): 560 million words, 1990-present*.
<https://corpus.byu.edu/coca/> (アクセス日: 2018年9月25日)
- 国立国語研究所『複合動詞レキシコン』
<https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon/> (アクセス日: 2018年8月14日)
- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search> (アクセス日: 2018年9月29日)
- 国際交流基金『海外の日本語教育の現状 2015年度日本語教育機関調査より』
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2015/all.pdf
(アクセス日: 2018年9月10日)
- 国立国語研究所 日本語教育研究・情報センター『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas/search> (アクセス日: 2018年9月29日)
- 国立国語研究所『Web データに基づく複合動詞用例データベース』
<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php> (アクセス日: 2018年8月14日)

謝辞

本稿は一部、東京外国語大学語学研究所で行われた東京外国語大学国際日本研究センター国際日本研究部門主催部門内『複合動詞研究プロジェクト』の「第3研究会 多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育第」(2018.01.18)の口頭発表の内容に基づく。発表の際に指摘をくださった方々及び査読者に御礼を申し上げる。

付録

付録 1

表⑦で「内部移動」を表す「一こむ」と英語、中国語、韓国語及びベトナム語との対応関係を示す（一定程度の対応がみられる場合に、「○」と記す）。英語のデータは本稿の筆者の判断による。韓国語については崔(2018)を参考に、中国語及びベトナム語については、平成 29 年度に東京外国語大学国際日本研究センターの支援を受けている「多言語による複合動詞翻訳プロジェクト」の基で作成された資料（和文と訳文）を参考にしている。表の下方の項目ほど対応関係が不完全になる傾向があるが、「その他」と分類される動詞を除けば、「内部移動」用法のほとんどが対応している。したがって、姫野(1978)による「内部移動」の下位分類は多くの日本語学習者にとって必ずしも示唆的な分類ではない。「内部移動」の「一こむ」は本文の 4.2 節で考察する。

表⑦ 姫野(1978)による「内部移動」を表す「一こむ」の下位分類と他言語との対応関係

姫野(1978)の分類	移動者	複合動詞の例 (前項動詞)	他言語における「内部移動」形式及び対応関係			
			英語 in/into	韓国語 「들다(tulta)」 「넣다(nehta)」	中国語 「一进(jìn)」 「一入(rù)」	ベトナム語 vào
閉じた空間 への移動	主体	上がり、落ち、 踏みなど	○	○	○	○
	対象	押し、叩き、 引きなど	○	○	○	○
個体の中 への移動	主体	食い、のめりなど	○	○	○	○
	対象	塗り、埋め、 刷りなど	○	○	○	○
流動体の中 への移動	主体	溶け、もぐりなど	○	○	○	○
	対象	沈め、漬けなど	○	○	○	×
集合体・ 組織体の中 への移動 ^{xvi}	主体	しみ、紛れなど	○	○	○	○
	対象	混ぜ、織りなど	○	○	○	○
動く取り囲み 体への移動	対象	包み、丸め、 着など	×	○	×	×
自己の内部		くぼみ、かがみ、 折れ、畳み、切り など	○	○	×	○
その他		のぞき、見、 当てなど	×	×	×	×

付録2：姫野（1987）、松田（2004）及びデータベースにおけるデータの比較

以下、姫野（1987）、松田（2004）及びデータベースに現れる「一こむ」の異同を表示する（紙幅の関係で前項動詞のみを表示する）。

a. 姫野（1987）、松田（2004）、データベースの全てに出現する「一こむ」

暴れ、編み、追い、送り、押し、織り、折り、書き、駆け、組み、誘い、忍び、擦り、炊き、積み、飛び、取り、怒鳴り、流し、流れ、殴り、投げ、逃げ、塗り、運び、引き、引っ張り、踏み、混ぜ、持ち、呼び、詠み、上がり、植え、埋め、教え、くるみ、仕舞い、染み、吸い、住み、貯め、抱き、包み、詰め、泊まり、飲み、乗り、入り、紛れ、潜り、思い、考え、座、黙り、寝、眠り、話し、冷え、老け、めかし、泳ぎ、聞き、使い、煮、練り、走り、磨き。

b. 姫野（1978）にあってデータベースにない「一こむ」

いせ、急ぎ、いり、受け、うずめ、うつむき、移り、うもれ、老いぼれ、拌み、溺れ、折り畳み、掻い、かがめ、かがり、かつ、かぶせ、かぶり、構え、からげ、借り、着せ、くぐり、くけ、くびれ、くぼみ、講じ、こごみ、こすり、困り、錆び、さまよい、さらい、しおれ、しけ、しけ、しゃべり、しょい、招じ、しょげ、じれ、すき、掬い、すっ、すまし、せがみ、せつ、たくし、たぐり、たくわえ、漬かり、照らし、溶き、なすり、習い、にじり、ねじ、這いずり、はげ、化け、はじき、ひたし、ひょろけ、更け、ぶち、ぶっ、篩い、ふんごむ、へ、へばり、頬張り、ぼけ、まくり、まくれ、まつり、まぶし、めくり、めくれ、よろけ、弱り。

c. 松田（2004）にあってデータベースにない「一こむ」

更け。

d. データベースにあって、姫野（1978）及び松田（2004）にない「一こむ」

遊び、合わせ、生け、撃ち、写り、抑え、踊り、飼い、掛け、囲い、貸し、噛み、聴き、斬り、消し、刺さり、絞め、締め、閉め、洒落、信じ、急き、倒し、立ち、立て、溜め、作り、創り、造り、つなぎ、吊り、解け、跳び、採り、摂り、悩み、鳴らし、寝かし、粘り、貼り、弾き、伏せ、掘り、混ぜ、回し、むせ、漏れ、焼き、やり。

i 本稿では表記の統一のため、一律に平仮名表記を用いる。

ii 姫野（1978）は自他の区別も明記しているが、「内部移動」を表す場合、自他は in(to)との対応に影響を与えるものではないようである。ただし、4.1 節で述べるように、「状態変化」を表す「一こむ」では自他が意味の解釈に影響を与える場合がある。

iii 『海外の日本語教育の現状 2015 年度日本語教育機関調査より』によれば、日本語学習者数を国別で見ると、中国（26.1%）、韓国（15.2%）、オーストラリア（9.8%）、台湾（6.0%）、米国（4.7%）、ベトナム（1.8%）が合わせて全体の約 64%を占める。

https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2015/all.pdf
（アクセス日：2018 年 9 月 10 日）

iv 出典のない例文は作例である。以下も同様である。

v 同様の現象が韓国語についても報告されている（崔 2018）。中国語及びベトナム語における「内部移動」の形式も「程度進行」の「一こむ」には対応しない傾向があるが、詳細は稿を改めて論じたい。

vi 「このデータベースは、複合動詞研究用の基礎データを提供することを目的として、Web データから機械的に構築したものです。収録語は、Web データにおける使用頻度に基づき、半自動的に決定しています。」（<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php> より。アクセス日：2018 年 9 月 21 日）

なお、姫野（1978）及び松田（2004）の分類には「暴れこむ」（143 件）、「めかしこむ」（145 件）、「泳ぎこむ」（108 件）のようにデータベースでは頻度が低い複合動詞もある。データベースのみで出現している複合動詞は最も頻度が低い「悩みこむ」でも 87 件と同程度の出現頻度がみられる。そのため、本稿ではデータベースの全データを分析の対象としている。

vii 「概ね」と断るのは、個別の動詞の分類に関して全て松田（2004）に同意するわけではないためである。

姫野（1987）と松田（2004）の分類の対応関係においても幾分かのずれがみられる。本稿では紙幅の関係で各分類における個別の動詞の分類の相違点は取り上げない。

viii 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」（正用・誤用含めて）では英語母語話者の産出には「一こむ」が1回も使用されていない。

ix 「データベース」で副詞や状況語との共起関係を調べると、「住みこむ」には「勝手に」、「座りこむ」には「呆然と」、「泊まり込む」には「徹夜で」と、望ましくない意味を表すことが多い副詞的要素との共起が顕著である。

x Walková（2017：606）は英語の命令文における Come on, eat up!（「はやく食べなさい！」）のような up の強調的な用法を指摘している。この表現は聞き手に食べる行為を促しており、食べるように命じているのではない。英語における「ものの量の増加」と「完了」との接点が見て取れる例である。

xi Beavers（2008）は前置詞句を結果述語とする結果構文について考察しているが、to と into の使い分けはまだ十分明らかにされていないと思われる。

xii <https://www.shape.com/fitness/cardio/30-day-running-challenge> より。アクセス日：2018年9月25日

xiii 単数事態である解釈も可能であるが、その場合「一こむ」と同様に「長時間」「継続」の意味合いが生じやすい。

xiv 「蓄積」という用語は甲斐（1999：4）に負う。

xv 「～した後、その状態で入る（入れる）」型の「一こむ」は、「内部移動」を表すわけだが、(i) のような表現は成立しにくい。英語ではこのような文が容認されるには (ii) でみられる厳密な継起関係及び物理的な接触が必要条件と考えられる（米山（2009）を参照）。

(i) ??Squeeze the lemon into the glass

(ii) Break the eggs into the bowl

xvi 本稿の筆者による「隙間のある集合体または組織体の中への移動」の省略である。